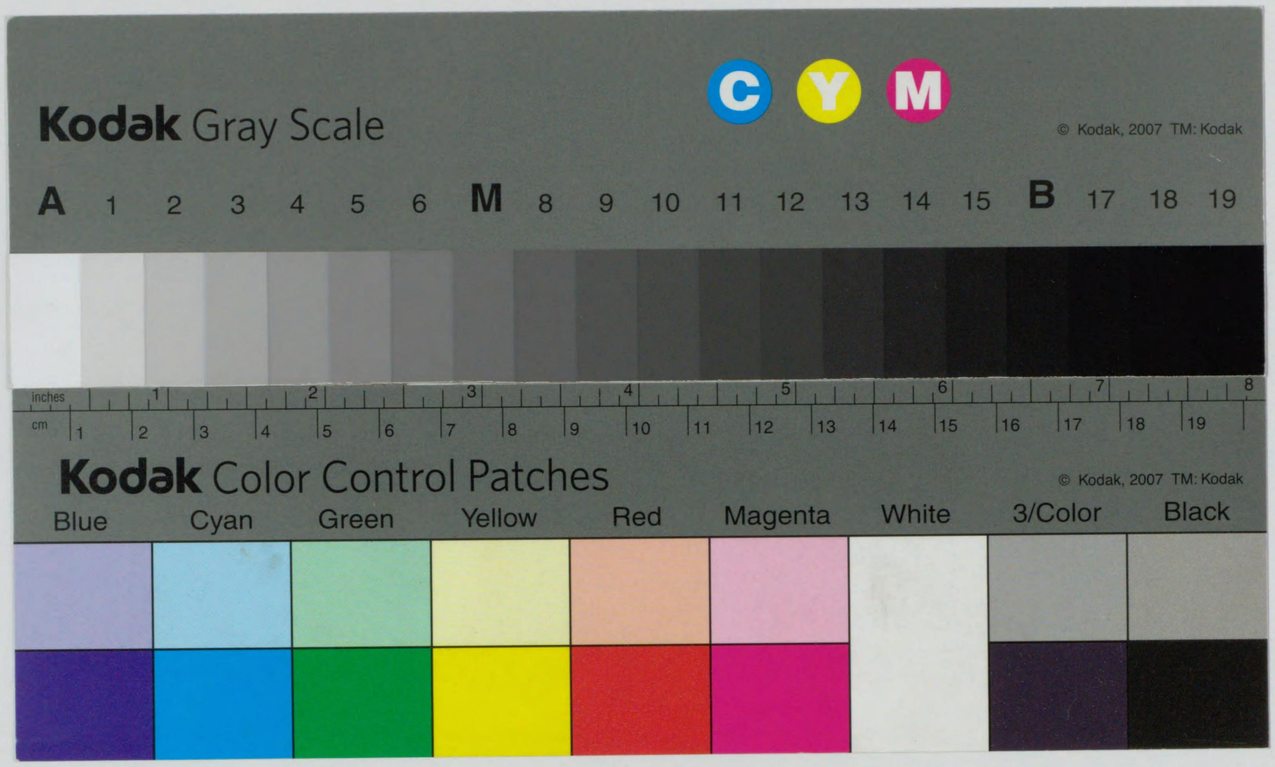
Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

216 140

又宮ばこうやうの人このうちに
ゐもるゝ事なくてぐしてゐ
ぬる程に神よりぐしてく
やうやうかうべもたげ
いでつゝ筆とりてかの
ぬしの許へ書おくる
いとやうやうにぞ物いひ
出あんかしこき法を
さまでこのいと
そぶ事をいふ

寶

唱よう　まう　ぶ　と　も　さ　い　ご　も
ま　ー　も　な　く　ご　ん　と　を　て　も　う　つ　ハ
名　ぶ　と　こ　ろ　し　と　思　そ　く　こ　ん　な　ろ　い　商　人　よ
お　ま　ご　よ　こ　ん　な　ろ　ご　と　も　と　ろ　ま　ご　あ　き　と
助　く　た　こ　ひ　ご　ー　ー　救　よ　う　ハ　助　ご　こ　と　も　ま　ま
行　よ　い　こ　よ　ま　志　そ　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
お　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー

中のそれを把(とら)えて注(そそ)ぐまでは半(なか)ばの人よ
まだ注ぐ時は別(わか)れの杯(さかづき)をさやうよ
とくうつくと走(はし)り帰(かへ)りの時はやうよと
中の人まだ注ぐ時さやうよと
てそれが注(そそ)ぐまではいまだよ
重(たび)ねる年と出(いで)るゆゑ女のうと又作
ず把(とら)えて又それを毛(け)注ぐ
しべうとそれを教(をし)へやうよまで
如(ごと)くしめよ又てうと注ぐまと又
月のごとつき作(つく)

よりどうぐ苦(くる)しく注ぐ時人を雇(やと)ひ
とえう年注ぐまでうと
さきをのづくまで
注ぐうくぐにうと
ばやまをうと
をぐら注ぐうくぐ
塩(しほ)人まで注(そそ)ぐうと
よれえいさうくぐ
なら注(そそ)よ毎(まい)年土(つち)
そのようまでとそし

忠を以て朋友の
把(とる)を以て文(ふみ)を会(かい)し
のづから先(まず)古(いにしえ)の神(かみ)と
の名(な)をくそでやう
又(また)これよの
人(ひと)あくいう(たり)
不(ず)のようをわ
把(とる)と言(いう)もの

心(こころ)をよくこゝろ
うくしくもの
作(つく)ごとく
ぞや又(また)
をしてくる
人(ひと)よ心(こころ)おごり
教(おしえ)と恨(うら)
ことのつまる服(ふく)
人(ひと)もしをとふ
そのしくいう

秦の始皇帝の代
と数ひらく民
ばこもい政つ
祖ハ三言と
いたさくもハ
の智恵とそ
もくんづし
くつけさるる

邪ん無とうさくこ
ゐ智ハまゝとい
を作小祥をいろ
ぎよこもとの
ゆぞや又玉つ
しゐさるるまで
さくく主ハいう
くもよ三年のそ
土穀ふ熟の時民の
めさくて又玉ん時兵

をもつて之に詰つ
とをくゝ玉ひ給ふ
たゞくと補ひ又ハ
よ事く海とも
そとも思ひくかゝり給ふ
ばゝもと限をせめたゞべ又兵よ
をもつてみそ
はゝわりて給ふ
やうそこをうつ

海嘯を造りといふ
ふの兵心をもつ
を何の益らん
ふ常よも
を与へ
こゝもよ生べくせい
ことく衆と
々たゝひ財を奪
毛不ふ敵よ

をもつてふ咸陽を征よ
秦の長城をと
史兵のつとも
治の民をこゝ
死をくくしと
彼の老たゝまんや
農傷ところ民
生を全人毛
思ひこゝ

仁義の徳を堅く守りて信義天の時地の利よ
をつづく要なり信義天之時地之利よ
りも人之和なりされば人の和ハ
まもるしよりて旅に治まると何のひ
やいなる兵なりとこころえそこなひ
も皆信義の術に実のなきよりおこる
ざるにまよひ人をしるに主
くるまでの智よくまことをつくし
るゆゑに大やまもるにも智としてき
がたく愚よりつねに治まるにつよ

うなるくわの治りぐ
きるの三ぐまき治
れりしもおそれ又拳とらるゝ治もい
伏義氏作りしハ先漢好くハ
くびまもるに本のせいの私上
もうるしハ生ものゝ外代作
ハ土壁をとつくりしの
感ぜしめ玉腹を
りうるの治ひ
もとくまをしりそ

むとし給うさこにて
ひいい張ともわらじ
手の匂ひして人
人丸土屋を動し
ける時琴をらく
初音と秩伐の
声もとも妙
人丸の

う　主みづから　器材のとぐ　屠所
もぐ　さ　歌の
うを　好　そ　そ
も秋の名残　と
とり　時うつり　月
をとる　目
を伝　伝
うを　まぐ　伝
うて　主
り　梅　多　主
り　立
とい　又　て　や　伝　伝　の　通　の　主　の　通　主　の　歌　と　求
ぐる　を　ひ　伝　又　と　ま　ぐ
あい　ま　ぐ　ご

人にかとうもたとうをそうじく
うわうめうと共伝と論
じてとうをとさまへと利欲化とし給
よろづ古き才と主
招戦の場よ名をあ
忠義とをくうてうべきうそ私
芸よのそうく勇と
我用加とのと人
うきうこと
ふうまひとをて

明をとひれたとさをつづあるし
又うと対ふうと唐の楊由ふとまうんと
ひよいたとひ給てどうう至給ふ私ひ亜
くるとしくうきくうじうじ
そうんぬと的ぐう
うくまれ私ゆくよふうう
辺一うと与うう
えてとたとひ給て
やふうそれ馬
ぬうく主人ひ両

り給ふをば馬よりおりて
よけ給ふ。又松ある所を
と称び給ふや。唐土の漢の文帝の時、天
くる馬わざと又周の穆王の代ともいふを
しるや。孔子の曰、昔の時を
うるものそのこゝろざし
常のごとくならざるをいふ
ぐもこゝろとけるをいふ
びたるかゝわしく

思ひ給ふついでにとてこゝろうる所
又民のそこなはざる
秋納むるをつくいたづ
をぐ給ふやうを熟
しるものをうけ給
ふをあぐ給ふ。又松ぐまぐ
らるゝをいふ。又松ぐとは
しばらくの農と
ず給ふをいふ

耕し、衣
年ごとに
時ふる
丹道と
田畠と公田
輩の眉と
月のさしけ
又ぐりよあると
方といふ

主人の田島まで
加よ出ぐとくやと
又きくみぐと
うそと俗人
色ぐそとい風陽
もろ
なじおぢ
死ぬ民の
俗のあ
かぐのい

空のをう主
よび信ささり
う道ぐ本主
形さまぐのと
れ目とも
潤とうさいさを
とりおぐ和
うまぐぐ足
やとりり貴
うひうり

の万ぐすりとおもひしくをれさまざまもた
もあ利をことを求行ひてうりて
物とまものさ作うつ又醫師の通ひ
薬の文ともとを乞ひて病と乞ひまた
皆とを作乞人いて元とおうつて気とうる
りつてうくきさまくと乞ことそ先とを
上うく薬とおうこと又行ふさうりさをあ
所ぐなのをいとうんうのこおとひし
乞行りまと病のいゆうるをまバ
急ぐくとを作乞人いて元とおうつて又道

をいがを人をうさとうさのそ名ふ
此不いつ天此あをつ乞ことをまづーさ
てい乞行人の此とめとえをもも力
れをとけうら人の財ととん
くおのづ命ぐやくるわぐ
とうくおをさつとぐ今とうづ
色治いみざうとを作とう泊もの
べをさうのまの年をのぐきわぐど
もいとうくひこをるみて

て道人をおそるることを
決とおくまぐよくそ
どいの番何の道人
よ教る乃道うとこいう
いくそうまこいのをそ
いく道に於略のごし
地の名に乃道人の名
まぐその道てあら毛
古格ハ本書格るわ
道をつる時ハ人て又舎歟
人ハ先と一太格う
の道とそし又同人
やいく書父子
土の道ハ多方ごくた
の同あとうきく
れハいん事よりうる
ぬよ通行あ
きも時て仁よ
敬よ乃人のよ多
父もハ事よ乃人の
て道人をおそるることを決とおくまぐよくそどいの番何の道人よ教る乃道うとこいういくそうまこいのをそいく道に於略のごし地の名に乃道人の名まぐその道てあら毛古格ハ本書格るわ道をつる時ハ人て又舎歟

人ハ先と一太格う
の道とそし又同人
やいく書父子
土の道ハ多方ごくた
の同あとうきく
れハいん事よりうる
ぬよ通行あ
きも時て仁よ
敬よ乃人のよ多
父もハ事よ乃人の
人ハ先と一太格う
の道とそし又同人
やいく書父子て民の父母をも放人
土の道ハ多方ごくたるものとやうとき幼児れて
の同あとうきくねの母よ約のまご
れハいん事よりうるぞ
ぬよ通行あるそ母之后よん
きも時て仁よ文王人の志
敬よ乃人のよ多そもし時そ
父もハ事よ乃人の

教ゆ年十五にして世の理を志ろざし学
あらゆるの経書諸子百家へ志を注ぎて之を研
究の道と教ゆを其ゆえよりて明徳と
名ろうと云ひ、孔子の門弟
子たり、聖人の教へ
あまねく、あまねく大海の
水を汲み尽すが如し。
ざるがいうよう之を為ゆえの
こまごまと学ぶありさまを
わらくいつゆえ求め道
設實ゆく名
ろまでという命ずるを
聖人の道決して
又人よ教ゆようを
して人を先又を
治つ般よりもって
也中よ通を

紀傳明經明法等道を學ぶ者は
のそぐ、文書をよく書と讀む或ハ
詩文作り和漢のいみ〳〵へ今の世に
詞よ毛をこう學ぶ人よ淺きことにて
よ約ふるうるとも文棚よりの
ぎを仏書とい毛ど
皆四一つ面をうぐ劉芽のごく合
ぬまくも物ゝ時よ愛とるもうまバ百巻
ど皆通流の佛
とつく乃流の佛と
とくて毛とよ
ど結ぼとい毛ど
ふよハあとど
まゐよとて禮
うあるもど山道の
事よまもたりど
佛のを約でもど
うい毛よのうち又佛のを

多くのすぐれたる
ものどもあつまりて
ともに一つの妙なる
うるわしき
ものどもありしかど
仏世尊未
だ曾て
説きたまわざりき
ところの
ものどもそのなかに
ありて
説きたまえり
今相応
の実
相
を
説きたまえり

瞋嗔恚是修羅餓鬼是癡是愚癡是
畜生うらやくとこまもの是大
四天王ともうつくしきやうなれども唯との佐とやく
四天王ともうつくしきやうなれども唯との佐とやく
をでき物いさゝかもわづらふ事なき百歳の後面
鼻とさゞ目と集りくちなはとさゞえ
ごとくいやしき尾とさゞえ
しとゝいやしき足をさゞえ

ろくの畜生うらや又きも
まうくるに益生をもとくいさゝかの理へ信ずと
しもとくしを拂しくく月縛のさけめう人
さうていう又さゝくいく人ゝ如來や佛さや參
ていくくさゝくもの
の因應をという生信ずるとを
地獄を人よおもやとも
いくくまいいん信つとうくと佛といをば
ろうやくうくうや人我是須弥非心是海
水煩惱是波浪毒害是悪龍貪欲是地

法ゟ得脱の上ハ訶ゟくりひろめんの心
をのづゝとゝのゞ技なのこゝろくか
をいしゝハ永ゟまりとゝかゞゟ赤免
て又ゟゝくいゝ浄土のくまをとゝいてゞ
もやうゟ。そこよりぐいゝやうゝてえ会へ永
ゟとゝゞやまこゝまでこの方のまゞ神のゟハゟ
ゟゝゟやゟゝ法までこゝ永のゟゞゟハ
神ゟ永ゟゟゟ

住するに非ず毛釈迦牟尼等の如くに
阿弥陀仏と無量寿仏を始めよ入てもし
ば〻大〻入て動
ことごとくの如くやうの是
故不動明王と号て世界十方よりきたるの
耳の通じ人をして
音といふ事のごとく
て一如の不生不滅
ことまた〻仏のごとく

ぜじ毛頭このゆへよりして衆生の幼といふ
ゆへ人の通ずるところのごとくに
ゆへといふに是仏体のごとくして
いふことしばし彼よりして
うまじ先切といふ此ゆへ
の気にて声ばかりの
のまへとこしへに
と当に往生の人先
往生して神通力

我宮川黍穆馨　青天白日得安寧
人心本是神明徳　皈一七情萬物灵
世のうつりもつねをてまもれる鏡
行いのうち

かくのごとくなる人の
多くいでくる世の人ども
こうむ

寛永十九年秋九月十六日書之

216
140

216
合/
140